

## 31-1164

医心方にみられる典籍について

○塩原 仁子<sup>1</sup>，伊田 喜光<sup>1</sup>（<sup>1</sup>昭和大薬）

中国医学は5世紀頃、日本に伝えられたといわれている。7世紀初め聖徳太子が隋の煬帝に書簡を送り、遣隋使遣唐使が相次ぎ中国に渡り、多くの中国医薬書が我国に伝えられた。中国から日本に渡来した人々によりもたらされた中国文化は急速に日本に浸透した。平安時代中期には他の分野におけると同様に医学の面でも国風化が計られた。即ちそれまでに輸入された多くの中国医書から日本の風土に適した薬方、方技を選んで医学全書を撰述することは時代の要求であった。現存する我が国最古の医書『医心方』は平安時代における隋唐医学の集大成である。編者、丹波康頼が『医心方』と命名した由縁は「国を医すには、人を医す。人を医すには、まずその心を医す」という、見地に立ち『医心方』と名付けたものと言われている。約1010年前（永観2年、西暦994年）に中国後漢の靈帝の子孫で日本に帰化した阿智王より数え、八世の孫に当たる丹波康頼が『医心方』を撰述した。全編が先行する多数の中国医書の抜粋の集成からなっている。当時として画期的なことは、全編日本人の手で編纂されたことであり、本邦の気候風土、民族性などの特殊性を考慮した治療法を選んでいること、理論的なもの、観念的なもの、繁雑で理解しにくいものは省略し直ぐに役立つものを優先して編纂されていることである。全編30巻からなり極めて多彩な内容を含んでいるが、当時の著書の特徴の一つとして、中国大家の諸説を紹介するにとどまり、撰者の意見が述べられていないことである。医心方に引用された隋唐方書の目録は、病源論、素問経、千金方、太素経、針灸経、明堂経、葛氏方、小品方、集驗方、経心方、養生方、徐伯方、龍門方、百濟新集方、隨時方、張仲景方、如意方、華佗方、撰集要方、急樂方、雜酒方、療眼方、本草経、新修本草、陶弘景本草註、本草拾遺、養生要集、眼論他である。長きにわたり秘されており、幕末に多紀氏により公刊されるまで医家の目に触れることはなかった『医心方』はかけがえのない史料である。